

## 都市農村交流におけるゲストのホスト化の過程 —岩手県バッテリー村を事例として—

山田義人(東農工大院農)<sup>1</sup>・広田純一(岩手大農)<sup>2</sup>・土屋俊幸(東農工大院農)<sup>1</sup>

**要旨**：戸数3戸、住民7人の集落、通称「バッテリー村」では、山村生活体験を主とした都市農村交流活動が26年間継続して行われている。活動が継続している理由の一つに、来訪者(ゲスト)が、イベントの運営や、体験時のインストラクター等の受け入れ側(ホスト)の業務について協力してきたことがあげられる(ゲストのホスト化)。ゲストのホスト化の過程を明らかにすることを目的とした。ホスト化の条件として、集落の住民が、地域資源を活かし、相手と接点を見出す交流を意識し、活動の理念を定め実行しながら、来訪者に対してそれぞれの個性に応じた役割の提供を行うことがあげられた。また、協力する過程では、来訪者が村内に自分の居場所や役割を見出し、活動への当事者意識を持つことで、活動の広がりや新たな協力者の確保につながる事が明らかになった。  
**キーワード**：都市農村交流 協力者 ゲスト ホスト 山村生活

**Abstract** : The Battaly village is a small village composed by 3 households with total number of 7 habitants. The Battaly village continues with Urban-Rural exchange mainly through village life experience for twenty six years. One of the main reasons which activity continue is visitors (guests) help hosts (hosts) activities, management of event and the instructor at the time of experience, etc(guests become hosts). The objective of this paper is to clarify the process of the guests become hosts. We found the condition to become hosts that hosts as the residents of a village make use of local resources, are conscious of the exchange which finds out a point of contact with a partner, provide activity's policy and practice, offer the role to the guests that accepted each personality. Moreover, in the process in which he cooperates, it became clear that a guests find their place to stay and role in village and has the party-concerned consciousness to activity. It lead to a spread of activity and secure a new cooperators.

**Key words** : Urban-Rural exchange, Cooperator, Guests, Hosts, Mountain village life

### I 背景と目的

近年、農村地域を、地域資源を活用した休養の場として活用し、都市住民のふるさとや豊かな自然を求める動きに対応すると同時に、地域の活性化を目的とする都市農村交流活動の取り組みが全国でみられる(4)。一方、農村地域の人員の不足や、住民が目的や手法が曖昧なまま来訪者を受け入れた場合、交流疲れに陥り、活動が継続しないことが課題として挙げられている(3)。

これらの課題に対し、唐崎ら(2009)は、茨城県内の農地を活用した体験活動を行う3つの事例を挙げ、活動の関係者を運営者、協力者、来訪者の3者に分類し、活動の持続には、地域内外の協力者と協力者のインセンティブ(意欲を起こさせる誘因となる外部環境)の確保が必要だと指摘した(1)。ここで、筆者は、来訪者の協力者への転換に注目したい。受け入れ側と迎える側という2つの決められた立場を超えて、お互いの状況を理解し、支えながら継続して交流できることにつながるからである。

そこで、本研究では唐崎らとバレーン・L. スミス(1991)のゲスト&ホスト論を参考にし(5)、活動の関係者を表-1.のように分類し、ゲストが準ホストの立場になることを「ゲストのホスト化」と定義した。

都市農村交流活動において、ゲストがホスト化するまでに、ホストはどのような働きかけや工夫をしたのか、ゲストは何に魅力を感じたのか、ゲストとホストの間にはどのような交流があったのか、以上の問いに答えることを本研究の目的とした。本研究の対象地は、活動を26年間継続して行い、かつ、準ホストが運営に関わっている岩手県久慈市山形町(旧九戸郡山形村)荷軽部地区木藤古集落、通称バッテリー村を選定した。なお、定義内の「地域」の範囲は旧九戸郡山形村を示すこととする。

表-1. 活動の関係者の分類

Table 1. A classification of the persons involved in activity

分類	定義
ゲスト	交流活動を展開する地域の外部に住み、観光や学習体験等の各々の目的を持って地域へ訪れる人
ホスト	交流活動を展開する集落内に住み、来訪客を受け入れる人
準ホスト	初めはゲストとして来訪し、交流活動を展開する地域の外部に住みながら交流活動の業務に協力する立場になった人
支援団体	交流活動を展開する地域内または周辺で活動し、ホストの活動を支援、応援する立場の人

### II 研究方法

1. 調査地概要 バッテリー村が位置する旧山形村(久慈市山形町)は、面積295.49 km<sup>2</sup>、人口3,132人(2005年国

<sup>1</sup>Yoshihito YAMADA, <sup>2</sup>Toshiyuki TSUCHIYA (Tokyo Univ. of Agric. and Technol., Saiwai-cho 3-5-8, Fuchu, Tokyo 183-8509),

<sup>3</sup>Junichi HIROTA (Faculty of Agriculture, Iwate Univ, Ueda 3-18-8, Morioka, Iwate 020-8550) The process of guests become hosts at interaction between Urban and Rural Area-A case study of Battaly-Village, Iwate Pref. -



IV ゲストのホスト化の過程

1. 個別具体例 訪れるゲストがホスト化するまでの過程を、準ホスト 10 人への聞き取りから、それぞれの個別具体例を基にして明らかにする。聞き取り対象者の情報は表 - 3. のとおりである。

表 - 3. 聞き取り対象者の情報

Table 3. The information of the person of hearing object

対象	年齢	性別	住まい	職業	初来村時の立場	準ホストの立場	現在の来村頻度
A氏	20代	男性	久慈市	無職	個人客	ボランティア	月に数回
B氏	20代	女性	久慈市	無職	個人客	ボランティア	週に1回
C氏	30代	女性	岩手町	(不明)	個人客	ボランティア	月に数回
D氏	50代	男性	花巻市	会社員	グループ客	サポーター	数ヶ月に1回
E氏	30代	男性	盛岡市	会社員	グループ客	サポーター	数ヶ月に1回
F氏	20代	男性	盛岡市	学生	学校(地元以外)	サポーター	数ヶ月に1回
G氏	20代	男性	盛岡市	学生	学校(地元以外)	サポーター	数ヶ月に1回
H氏	50代	男性	盛岡市	大学教員	視察者	アドバイザー	半年~1年に1回
I氏	20代	男性	熊本県	施設職員	個人客	ボランティア →OB・OG	約2年前に来村して以来、来村無
J氏	30代	男性	北海道	会社員	グループ客	サポーター →OB・OG	約3年前に来村して以来、来村無

注：2011年3月時点での情報を示す。

E氏とJ氏には質問票をメールで送付し、不足部分は電話で聞き取りを行った。

資料：聞き取り調査より

(1) A氏がボランティアになる過程 大学で地域活動支援を学び、地元の久慈市での活動を模索していたA氏は、2008年にテレビ番組を観て、当時バッテリー村に住み込み、山村生活を学んでいたI氏のことを知り、同年2月か3月に初来村した。I氏に会えたのは同年9月に来村した時だったが、その時、村長からイベントのアイデアを求められ、「自分はお茶出しができるので茶店をやみましょう。」と協力し、村長もそのアイデアを採用し、本番も成功しA氏は活動へのやりがいを感じた。その後は、インストラクターやイベント時の連絡係を引き受け、村の運営に関わり、活動への当事者意識が芽生えていった。

(2) B氏がボランティアになる過程 村長の知り合いだったB氏の父が、村で行われたイベント「第5回縄ない選手権大会」を取り上げた新聞の記事を見て、家族で観光しようと言い出し、B氏は2009年に初来村した。B氏は高校卒業後、定職につかなかったため、B氏の父が村長に「何か娘の手伝うことはないか」と頼んだ。そこで、村長はB氏が草木染めに興味を持っていることを知り「興味があるなら手伝ってくれないか」と頼み、B氏は「時間もあふし、とりあえずやってみようかな」と思い、取り組んだ。村内の資源を使った草木染めで多様な色を出すことを楽しく感じ、それをインストラクターとして来村者に教えることにやりがいを感じるようになった。また、リピーター

を増やすための工夫を考える等、活動への当事者意識が芽生えていった。

(3) C氏がボランティアになる過程 C氏は、2009年3月に北東北で地域活動を行っている人の集まるイベント「凡人大会」で村長と出会い、「いつでも来村してください」と誘いを受けた。自然に囲まれた中での生活に興味を持っていたC氏は山村生活を学ぶために来村し、学ぶ代わりにイベントの協力も行っている。

(4) D氏がサポーターになる過程 D氏は、1989年11月に行われた第十回東北自然保護の集いの開催地としてバッテリー村を選び来村した。自然に負荷をかけない暮らしに興味を持っていたD氏は、バッテリー村で村長の父や、村民の暮らし技術や知恵、文化に大変興味を持った。D氏は山村生活を残したいと考え、初来村以降、自身が関わる自然保護団体や学生を村に誘致し続けている。訪れるうちに村長から運営の相談を受けるようになったD氏は、バッテリーネットのまとめ役となり、現在もイベントの協力をし、準ホストの中でも村の運営に最も深く関わっている。

(5) E氏がサポーターになる過程 E氏は学生時代に、学生と社会人が所属する自然保護サークル「岩手自然の会」に所属しており、サークルと関係があったD氏に連れられて村にやってきた。2000年に体験施設「森のてらこや(学習交流館)」の建築にも携わり、バッテリーネットにも所属し、D氏と共に継続的に協力を行っている。

(6) F氏・G氏がサポーターになる過程 F氏とG氏は、岩手大学農学部の学生である。2009年7月にH氏が担当する現地実習のため初来村し、宿泊体験を行った。バッテリーネットも協力のため訪れており、2人はそこでD氏、E氏と出会い、「木を運ぶのを手伝ってくれ」と頼まれ手伝った。その後も、D氏やE氏から連絡や誘いがあり、2011年3月時点で、F氏は計5回、G氏は計9回来村している。G氏は、E氏から2010年の縄ない選手権のイベントの総合司会を任された。「少し大変だがお世話になっているし、人出も足りないので手伝おう」と、活動への当事者意識が生まれていた。

(7) H氏がアドバイザーになる過程 H氏は、農村計画専門の岩手大学教員であり、旧山形村グリーン・ツーリズムへの提言の報告書作成を目的に、1996年に初来村した。報告書作成後も、村長から運営に対する助言を求められており、直筆の手紙で相談を受けることもあった。2000年に村長を岩手大学の講義に講師として招き、2005年からは毎年、現地での実習のため、学生を村に連れて行っている。2006年には、バッテリーネットの人から頼まれ、茅葺屋根の葺き替え費用の寄付金集めを行う「バッテリー村を支援する会」の代表になり、このときは約200万円が全国の村

の関係者から集まった。H氏は「村長や、バッテリーネットのD氏をはじめとする村の方々は、人を引き込み、役割を用意するのが上手い」と感じながら、H氏自身も自分の活躍する機会を与えられていたことを嬉しく感じていた。

(8) I氏がボランティア～OB・OGになる過程 I氏は、大学在学中に日本中を旅して農業や牧畜を勉強していた時に、バッテリー村では藁草履体験ができると知って2006年1月に初来村し、山村生活に興味を持った。2009年2月まで、1か月以上の滞在を計5回行っている。3回目の来村の前には、大学を中退し、長期間村で勉強しようと決意したほど村との出会いは大きかった。2008年8月には、I氏が山村生活の素晴らしさを伝えたいと思い、炭焼きツアーを自分で企画し、村長は「興味のあることは好きにやっ

ていいよ」とI氏を応援した。I氏は熊本県での就職を機に村を訪れていないが、25周年記念行事の際には電報を届け、村から離れた場所に住んでも関わりを持ち続けている。

(9) J氏がサポーター～OB・OGになる過程 J氏は、1994年に弘前大学のサークルの集まりでバッテリー村に初来村した。そこで、茅葺屋根の民家の風景を見て、村をふるさとと感じた。学生時代は年間約4回来村し、卒業後も盛岡在住中には、D氏やE氏と共に、20周年記念行事に関わる機会があり、バッテリーネットの事務局も引き受けた。J氏は自分にできる仕事を行い、村に協力したいと考えていたが、北海道への移住を機に、協力が難しくなった。

表 - 4. ゲストのホスト化の過程の比較

Table4. Comparison of an individual example

対象	初来村目的	自発性	ホスト・準ホストからの働きかけ	働きかけをした人物	ホスト化のやりとりが初めて起きた時期	対象者の主な興味
A氏	I氏に会う	○	インストラクターの協力の要請	村長	2008年	地域づくり
B氏	家族で観光	△	インストラクターの協力の要請	村長	2009年	草木染め
C氏	山村生活の学習	○	学習の場の提供	村長	2009年	自然の暮らし
D氏	自然保護団体の集い	○	活動の相談	村長	1989年～1995年	環境に負荷をかけない暮らし
E氏	サークル活動	△	活動の協力の要請	D氏	1995年	自然の暮らし
F氏	大学の實習	△	活動の協力の要請	D氏、E氏	2009年	自然の暮らし
G氏	大学の實習	△	活動の協力の要請	D氏、E氏	2009年	自然の暮らし
H氏	報告書作成	△	活動の相談	村長、バッテリーネット	1996年～2000年	地域づくり
I氏	わら編加工の学習	○	学習の場の提供	村長	2006年	自然の暮らし
J氏	サークルの先輩に誘われて遊びに行く	△	活動の協力の要請	D氏、E氏	1994年～1998年	自然の暮らし

注：○→自発的に来村を決めた。△→誘われて来村を決めた。または、調査・實習等で来村を決めた。

資料：聞き取り調査より

2. まとめ 準ホストの調査結果より、ホスト化の過程において、ホストまたは準ホストからゲストに対して、それぞれ個性に応じた役割の提供が行われていたことがわかった。村長は、地域活動や山村生活に興味を持っていた

A氏、B氏に対しては協力の要請を行い、学ぶ場所や機会を求めているやる気のあるC氏、I氏に対しては場を提供して応援し、村に価値を見出し力になってくれそうなD氏、H氏には相談を行っていた。また、準ホストとなったD氏が学生のE氏、J氏を、D氏とE氏がF氏、G氏を村に誘ったように、準ホストが新たな協力者を連れてくる場合も見られた。さらに、準ホストのホストへの継続的な協力や、マスコミの影響も、来訪者の増加につながった。また、準ホストは関わる過程で、村内に自分の居場所や役割を見出し、活動への当事者意識が生まれていった。

#### Vおわりに

以上より、ゲストのホスト化の条件として、以下のことが考えられる。ゲストには伝統的山村生活への興味、理念への共感、活動への参加、ふるさととの場を求める個性が必要である。一方、ホストは、相手との接点の発見、地域資源の活用、理念を実践に移す意識、ゲストの個性に応じた役割の提供が必要である。

L氏や、I氏やJ氏の例もあるため、ゲストの活動に協力できる時間や、住む場所がどの程度ホスト化の阻害要因になるかの検討については今後の課題としたい。

また、村長の高齢化と、後継者の不在は、準ホストの確保が、ホストの定住人口の増大と、次世代の活動の継続に必ずしも結びつかない可能性を示しているとも言える。

最後に、後継者の確保と言う点で課題は残したものの、ゲストが村内において自分の居場所や役割を見出す交流を行ってきたバッテリー村の、ホストの働きかけや工夫は、都市農村交流活動において課題となっている協力者の確保と、活動の継続の面で参考にできる部分が多いと考える。

#### 引用文献

- (1) 唐崎卓也・安中誠司・木下勇 (2009) 農業・農村体験活動関係者の参加モチベーションとインセンティブ. ランドスケープ研究 72 : 835～840.
- (2) バッテリー村 (2005) バッテリー村開村 20 周年記念誌つどいつむぎつたえようー山村からのメッセージ. 51pp., 同村, 岩手.
- (3) 森戸哲 (2001) 都市と農村の共生を考える～交流活動の現場から～. 農村計画学会誌 20 : 170～174.
- (4) 大浦由美 (2008) 1990年代以降における都市農山村交流の政策的展開とその方向性. 林業経済研究 54 : 40～48.
- (5) バレーン. L. スミス(1991) 序論. (観光・リゾート開発の人類学 ホスト&ゲスト論でみる地域文化の対応. バレーン. L. スミス編, 三村浩史監訳, 394pp., 勁草書房, 東京) . 14～15.